

広島県北部における弥生墳丘墓の成立と展開

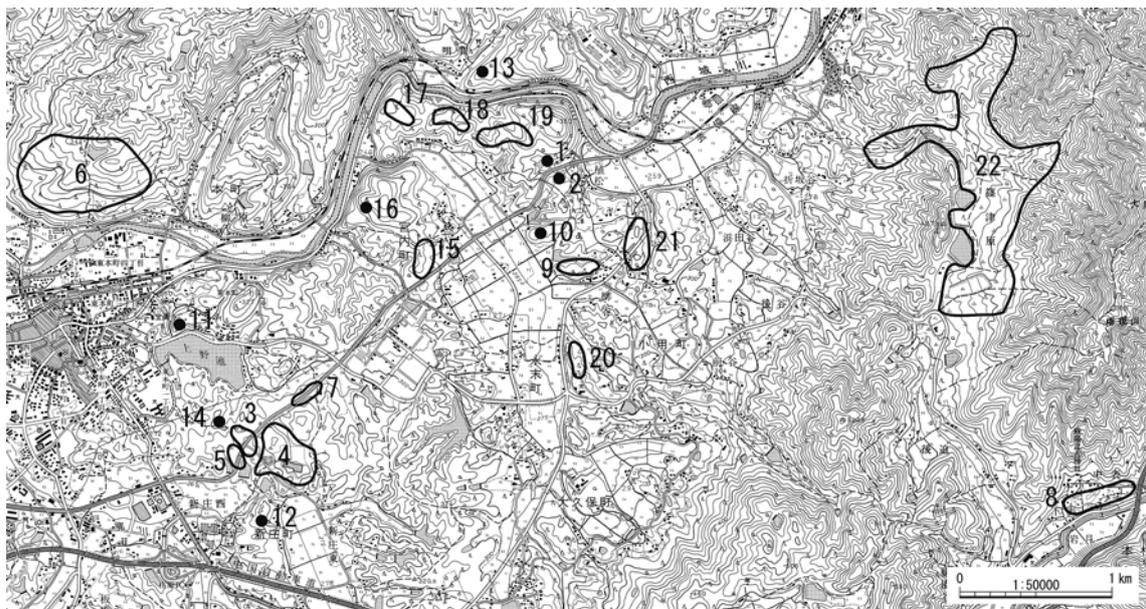
— 佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査を通して —

野島 永

1. 広島県庄原市佐田谷・佐田峠墳墓群の発見とその後

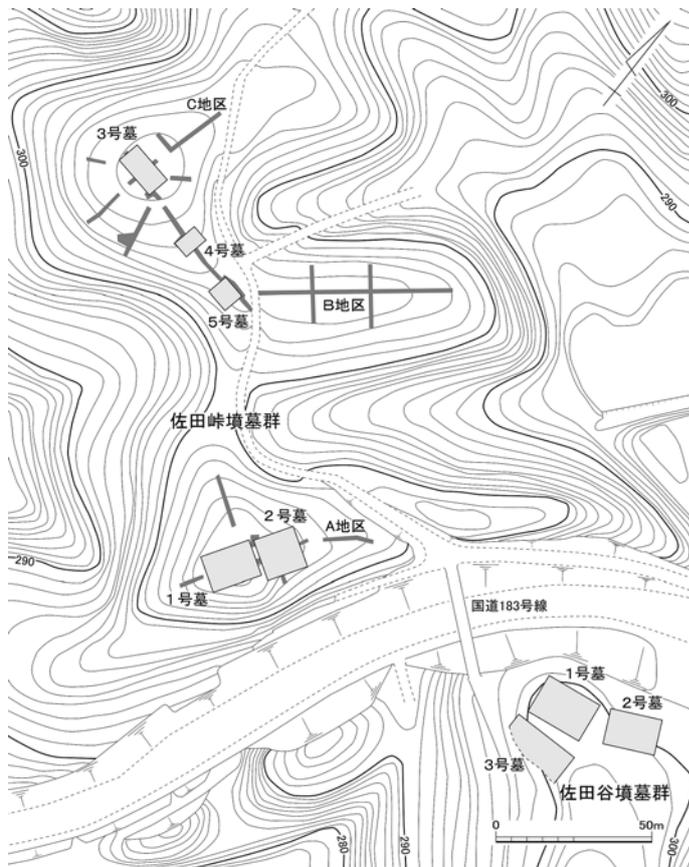
佐田谷墳墓群は庄原市高町大字佐田谷・宮内町大字佐田峠ほかにある。庄原市街地から西城町に向かう一般国道183号線のバイパス道路建設にともなって1986（昭和61）年に発見された（第1図）。道路建設用地買収後に見つかったものの、文化庁や広島県教育委員会の指導と地元住民の保存要求のもと、広島県立歴史民俗資料館、庄原市教育委員会など関係機関の協力によって、3基の弥生墳丘墓の現地保存が実現した（妹尾編 1987）。

その後、周辺はさらなるバイパス道路整備計画（江府三次道路建設）の路線地内に含まれたことから、1997（平成9）年に庄原市教育委員会によって佐田谷墳墓群の西側隣接地の試掘調査が行われ、佐田峠墳墓群の詳細が確認された。その際にA・B・C地区が設定され、A地区では方形台状墓（佐田峠墳墓群1・2号墓）、C地区では四隅突出型墳丘墓（同3号墓）や方形貼石墓（同4号墓）、方形周溝墓と推測される周溝（同推定5号墓）などがトレンチ調査によって明らかとなった（第2図）。このため、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所との協議によって、1・2号墓周辺と3号墓およびその周囲の遺構確認部分（4・5号墓）が現状のまま保存された。



第1図 佐田谷・佐田峠墳墓群と周辺主要遺跡分布図（1/5000）

- 1. 佐田峠墳墓群 2. 佐田谷墳墓群 3. 小和田遺跡 4. 和田原遺跡群 5. 西山遺跡
- 6. 御神田山遺跡群 7. 永宗遺跡 8. 鋏寄遺跡 9. 広政古墳群 10. 矢崎古墳 11. 瓢山古墳
- 12. 地王神社古墳 13. 唐櫃古墳 14. 牛塚古墳 15. 陰地古墳群 16. 殿島山古墳 17. 大歳古墳群
- 18. 山根古墳群 19. 寄藤山古墳群 20. 永末古墳群 21. 柳谷古墳群 22. 篠津原遺跡群



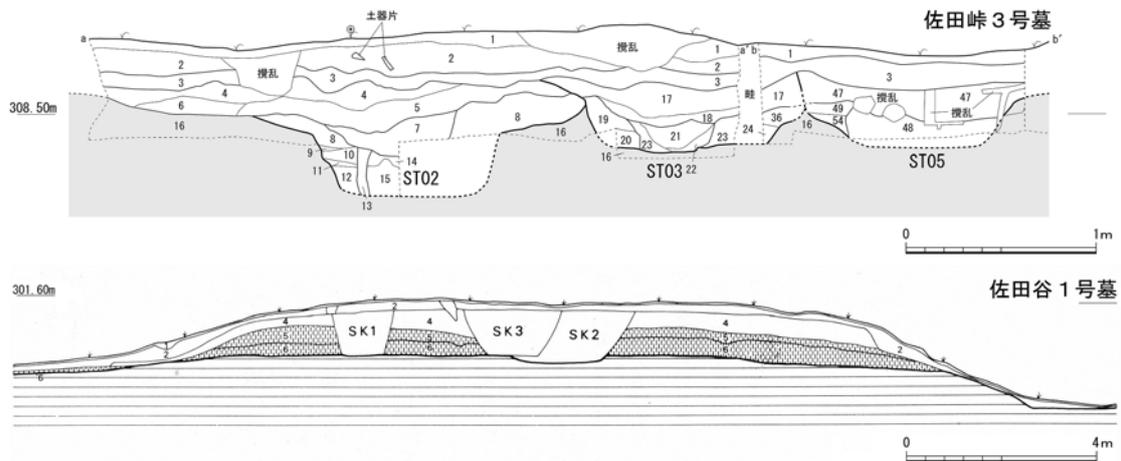
第2図 佐田谷・佐田峠墳墓群の調査地区と墳墓位置図

ではA地区の佐田峠1・2号墓と佐田谷2号墓の発掘調査を行い、毎年度その調査成果を報告してきた（野島・石貫・辻村ほか 2009、野島・矢部 2010、野島・脇山・齋藤ほか 2011、脇山・今福・小森ほか 2012、野島・辻村・藤井・村田 2013）。つまり、佐田峠1・2号墓は外表施設をもたない方形台状墓であることや、佐田峠3号墓は貼石をもつ四隅突出型墳丘墓であること、佐田峠4号墓は貼石と列石をもつ四隅突出型墳丘墓だが、その後墳丘が改変されていたことなどが判明した。また、佐田峠5号墓については周溝の内側に埋葬施設が確認され、方形周溝墓であることが確定した。佐田峠墳墓群は様々な墳丘形態の墳丘墓が造営され、埋葬が繰り返されるごとに墳丘が改変されていったことがわかったのである。このような墳墓形態の多様性は、三次地域の弥生時代中期後葉前後の墳墓群にはない特徴といえる。これは以前に確認されていた佐田谷墳墓群にもいえることである。佐田谷1号墓は長方形墳丘の周囲斜面に列石と貼石を張り、浅い周溝をもつ四隅突出型墳丘墓だが、佐田谷3号墓は貼石など外表施設をもたない方形台状墓であることが判明している。佐田谷2号墓は一部に列石と周溝をもつ四隅突出型墳丘墓の可能性のあるものの、これまでに墳丘斜面には貼石が確認されてはおらず、いまだ不明な部分が多い。隣接した3基ではあるが、突出部や列石、貼石などの有無がそれぞれに異なっていたことがわかっている（妹尾編 1987）。

庄原市教育委員会では、佐田谷・佐田峠墳墓群の史跡指定の可能性を模索するために、広島大学考古学研究室に学術調査の依頼を行うこととなり、2008（平成20）年度から2013（平成25）年度にかけて、両者による発掘調査が実現した。

2. 佐田谷・佐田峠墳墓群の調査成果

庄原市教育委員会との共同調査が締結される前年度の2007（平成19）年度には第1次調査として、佐田峠墳墓群の測量調査をおこなった（野島・石貫・斎藤 2008）。その後、庄原市教育委員会の試掘調査時の平板測量記録に基づき、第2～4次調査では、C地区の佐田峠3・4・5号墓、第5次調査



第3図 佐田峠3号墓と佐田谷1号墓の墳丘構築方法の差異
(佐田峠3号墓1/40、佐田谷1号墓1/160)

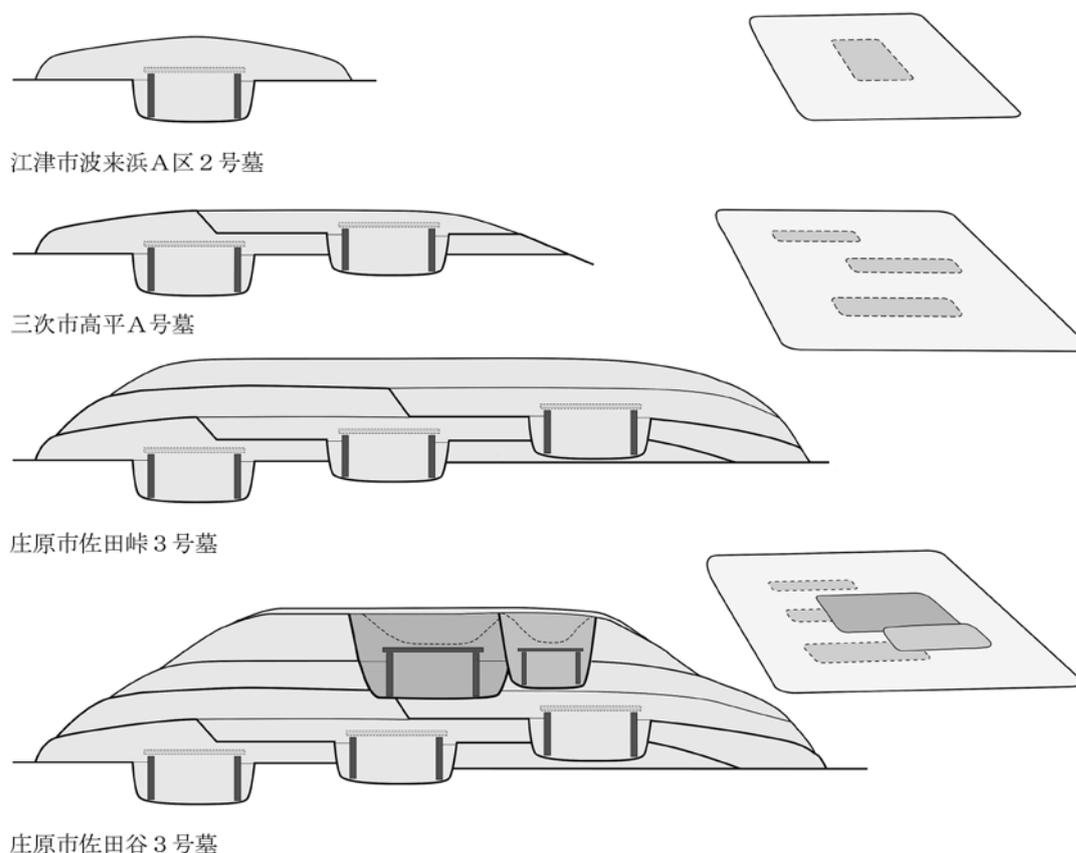
(1) 各墳墓の時期

出土した土器を基準としてみれば、周溝から塩町式土器が出土した佐田谷3号墓が弥生時代中期後葉から末葉頃に築造され始めたようである。次いで中期末葉頃に佐田峠4・5号墓の築造が続いた。佐田峠3号墓の墳丘構築は中期末葉から後期初頭以降まで継続したようである。後期初頭までには佐田峠1号墓と佐田谷1号墓が相次いで造営された。後期前葉になると佐田峠2号墓、さらには佐田谷2号墓が継続するが、その後には新たな墳墓の造営はみられなくなる。両墳墓群ともに中期後葉から末葉にその造営が開始され、埋葬がくり返されたものの、後期前葉にはともに終焉をむかえたことがわかる。

(2) 墳丘構築方法と埋葬施設

これまでの発掘調査のなかでも重要な成果のひとつに、佐田谷・佐田峠墳墓群内において墳丘構築方法の差異を確認したことが挙げられる。弥生時代中期末葉から後期初頭に属する佐田峠3号墓は大規模な墳丘構築・整形の前に墓壇の掘削をおこない、木棺を埋葬し、埋め戻して封土で覆っていた。その後、隣接して数回の墓壇掘削・埋葬・封土をくり返し、墳丘が徐々に形成されたのちに、埋葬の直上に墓標と考えられる拳大の石が数個設置され、全体を薄い盛り土で覆ったのちに墳丘周囲の斜面部に貼石が施されていた(野島・石貫・辻村ほか2009)(第3図上)。ほぼ同時期となる佐田峠4号墓も埋葬後に墳丘が構築された可能性が高いものであった(野島・矢部2010)。

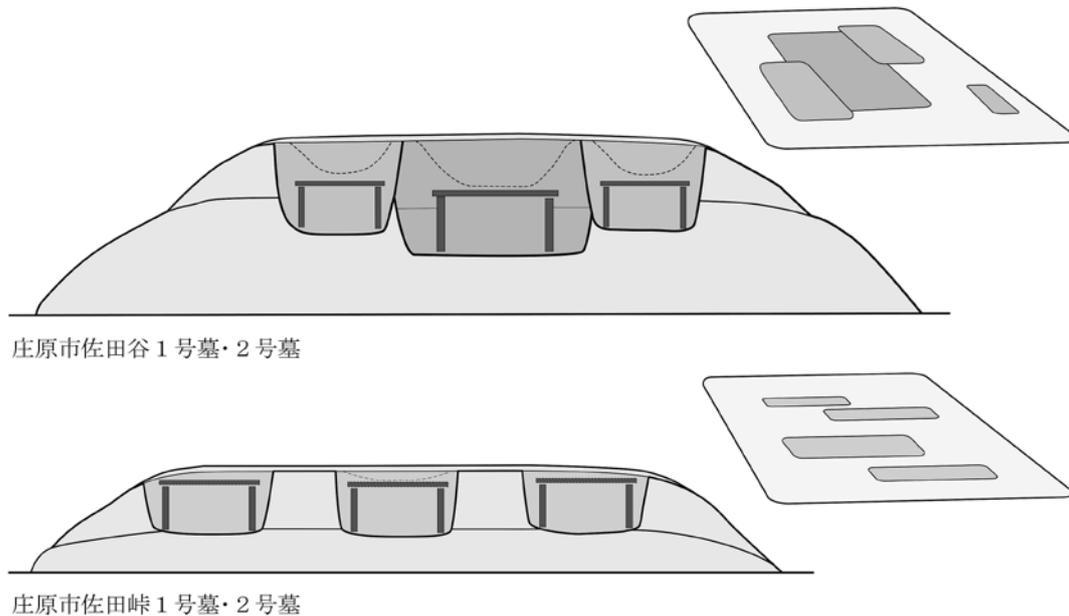
しかし、弥生時代後期初頭に構築された佐田谷1号墓において確認された墓壇4基はいずれも墳頂平坦面地表直下において確認されていた(妹尾編1987)(第3図下)。つまり、両墳墓群には、墓壇掘削と埋葬・封土の一連の行為が墳丘構築過程として数回繰り返して行われる「同時進行型」と、墳丘構築とおおよその整形が行われた後に墓壇が掘削される「墳丘先行型」(和田2003・今福2012)の二者が存在することがわかったわけである。それが墳墓群の間の格差なのか、墳丘墓の時期的な変化なのかを検証するために、2012年度(第6次調査)、佐田峠1・2号墓と佐田谷2・3号墓の埋葬施設を確認する追加調査を行った⁽¹⁾。



第4図 佐田谷・佐田峠墳墓群の墳丘構築方法比較模式図(1)(弥生時代中期)

その結果、佐田谷3号墓では、墳丘下位に小規模な墓壙が配置され、墳丘を構築しながら埋葬が継続していた状況が明らかとなった(野島・辻村・藤井・村田 2013)(第4図下)。その後、庄原市教育委員会による佐田谷3号墓の発掘調査において、墳丘地表面直上から全長6mを超える中心埋葬の大型墓壙が検出され、この墓壙に一部重複する周辺埋葬の墓壙が確認された⁽²⁾。ちょうど同時進行型と墳丘先行型の折衷型とも捉えられる墳丘墓であると推測することができたのである。佐田谷2号墓でも、中心埋葬と思われる墓壙に一部重複するように周辺墓壙が配置されていたことが判明したが、これは墳丘先行型の構築方法であることが推測できた(第5図上)。また、佐田峠1・2号墓では、墳頂部平坦面の地表直下に平行して並ぶ墓壙配置が確認され、これもまた墳丘先行型の構築方法であることが推測された(第5図下)。

以上の追加調査から、同時進行型と墳丘先行型はどちらの墳墓群にも確認されたこと、また、両墳墓群ともに中期末葉までは同時進行型であったものが、後期初頭には墳丘先行型に移行していたことが判明したわけである。佐田谷・佐田峠墳墓群は中期後葉から末葉段階、ともに数回の埋葬をくり返しつつ、墳丘を徐々に形成していく同時進行型の墳丘構築方法を採用していたが、後期初頭から前葉になると、墳丘をほぼ構築したのちに、墳頂平坦面に数基の墓壙を掘削する墳丘先行型の構築方法へと変化していった(第4・5図)。



第5図 佐田谷・佐田崎墳墓群の墳丘構築方法比較模式図(2)(弥生時代後期)

(3) 墳墓群間の格差

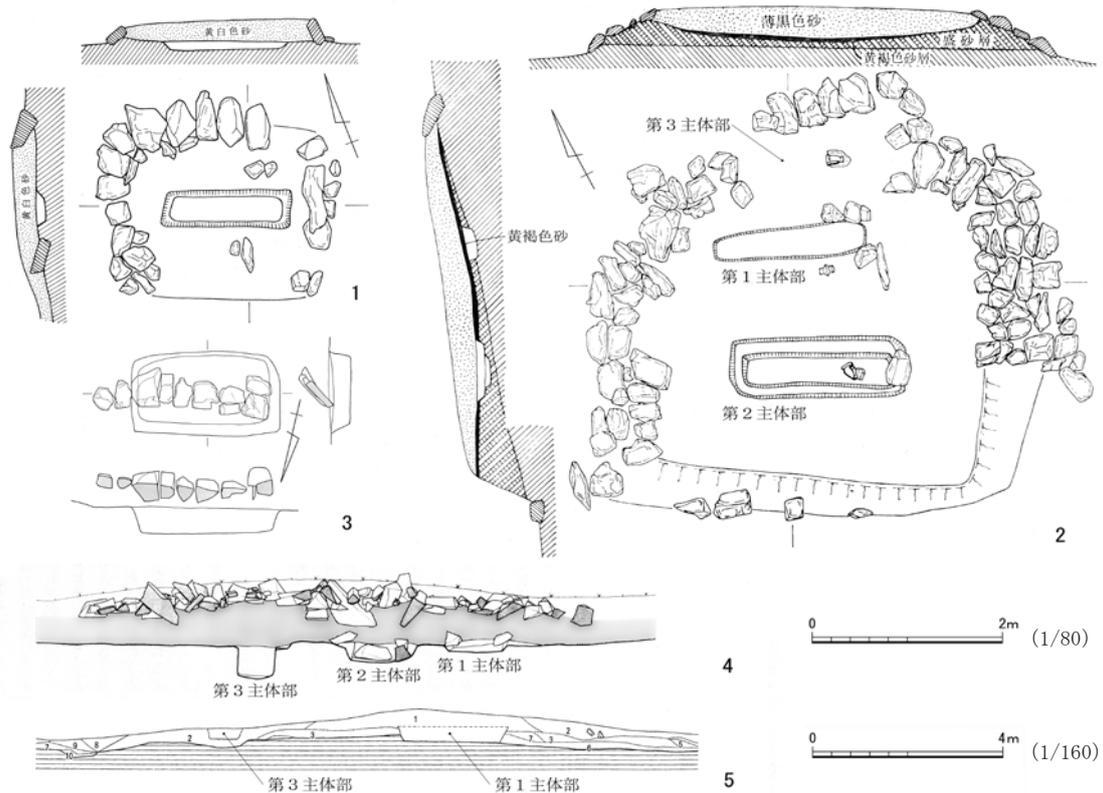
両墳墓群は歩調をあわせて墳丘構築方法を変化させていった一方で、佐田崎墳墓群では後期初頭においても依然として小規模な埋葬施設(墓壙)が数基並置される墓壙配置を変えず、中心埋葬の大型化を実現することはなかった。墳丘全長も20mを超えることはなく、佐田谷墳墓群よりも相対的には小規模な墳丘しか造営できなかった。

これに対して佐田谷墳墓群では、20mを超える墳丘を構築し、中心となる大型埋葬施設が出現した。佐田谷2号墓の中心墓壙は佐田谷1号墓の中心墓壙同様、墓壙規模が4mを超えるだけでなく、木棺蓋の腐朽にともなう落ち込み埋土がみられたことから、大型木棺が埋置されていたと想定することができる。佐田谷2号墓においては、中心埋葬となる墓壙が大型化するだけでなく、この墓壙の一部を破壊してさらなる墓壙が掘削されており、周辺埋葬が中心埋葬を圍繞するような墓壙配置が企図されたことを示していた(第5図上・第8図左)。先述したように佐田谷3号墓においても6mを超える中心墓壙が検出され、その周囲に2基の周辺埋葬がみられたことも重視しておきたい。

3 墳丘の構造変化と葬送

(1) 墳丘墓の遡源と墳丘構築方法

佐田谷・佐田崎墳墓群の発掘調査では、弥生時代中期段階の墳丘構築方法は同時進行型であった。この点で注目されるのが庄原地域に隣接する三次地域、さらに三次地域を含む江の川流域に分布する弥生時代前期から中期にかけての小型の墳丘墓⁽³⁾である。以下に類例をみてみよう。



第6図 江の川流域における墳丘構築状況の類例（弥生時代前期から中期）

1. 江津市波来浜遺跡A調査区4号墓 2. 同市波来浜遺跡A調査区2号墓
3. 三次市四拾貫小原弥生墳墓2号墓 4. 同市高平A号墓 5. 同市宗祐池西遺跡1号墓

島根県江津市波来浜遺跡墳墓群（第6図1・2） 江の川下流域にある江津市波来浜遺跡は石見海岸の砂丘地帯にあり、弥生時代中期中葉から後期中葉前後の墳丘墓が検出された（門脇 1973）。なかでもA調査区では、6基の列石や貼石をもつ墳丘墓が確認されている⁽⁴⁾。多くが埋葬墓壇を1基のみしかもたないものだが、2号墓だけ墳丘内に2基、北側に増設された貼石内部にも1基の墓壇が確認された。

4号墓は長辺2.5m、短辺2.0m前後の小規模な墳丘を持ち、周辺斜面に板石をもつ（第6図1）。墳丘中央部に墓壇を穿ち、直接遺体を埋葬し、埋め戻して側辺両側に標石を設置した後に20cm前後の黄白色砂で覆って、その周囲に板石を巡らせたものである。副葬品などはなかったものの、A調査区の出土土器から弥生時代中期中葉前後に属するものと推測できる。規模は小さいものの、墓壇の掘削ののち、墳丘を構築する「墳丘後行型」（和田 2003・今福 2012）であることがわかる（第4図上）。

A調査区2号墓（第6図2）はやや規模が大きく長辺5m、短辺4m前後である。南側に傾斜する斜面地に砂を盛って高くした土台（盛砂層）を作り上げている。その後、第1主体部を穿ち、埋葬・封土・土器供献を行い、墓壇東側（被葬者の頭部側）に標石を設置して、黄褐色砂で墳丘全体を覆っていた。弥生時代中期中葉に属する。第2主体部はさらにその黄褐色砂を穿って2段墓壇が造られており、同様に土器供献と頭部付近に標石の設置を行っていた。その後薄黒色砂で墳丘全体を覆い、墳丘の構築を終えている。第3主体部がいつ設置

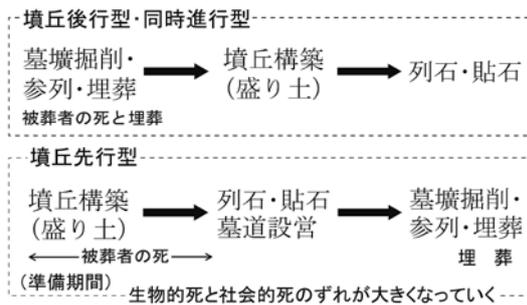
されたかは不明ながら、墳丘周囲を巡る板石状の貼石を改変しているところからすると、薄黒色砂を盛り上げたのちである可能性が高い。後述する高平A号墓同様、小規模な墳丘となる同時進行型であり、埋葬と封土を繰り返す点には共通性がある。

広島県三次市高平A号墓（第6図4） 三次盆地のほぼ中央、十日市町にある高平A号墓は出土土器から弥生時代前期後半から中期前葉に属するとみられる。土壙墓1基と木棺墓2基の上に黒フクの封土が施され、長軸5.5m、短軸3.4mの長楕円形の範囲に角礫が積み込まれていた（潮見・川越・河瀬 1971）。南から第3・第2・第1主体部がそれぞれ配置されていたが、3基の墓壙底面は順次南から北に向けて徐々に浅くなっていた。封土と角礫は墓壙ひとつずつに施されたもので、3回の埋葬の結果、最終的に一つのまとまり（墳丘）になってしまったと推測されている（妹尾編 1987）。このことからすれば、高平A号墓は墳丘内の土層分層が不分明ではあったものの、小規模ながらも同時進行型の墳丘構築方法の先駆的形態を示していると想定できる（第4図上）。

広島県三次市四拾貫小原弥生時代墳墓群（第6図3） 四拾貫小原遺跡の弥生墳墓は三次盆地東部、宗祐池西遺跡の北東にある。1969年に発掘調査がなされており、塩町式土器が出土したことから弥生時代中期後葉を前後する時期に属することがわかる（潮見編 1969）。実測図などからは墳丘周辺の外表施設と考えられる板石の下部に墓壙が検出された状況を推測することができる。おそらくは下層において数回墓壙を掘削し、埋葬が行われたあとに墓壙群の中央付近に長辺6～7m、短辺5m前後の長方形墳丘を構築し、斜面に貼石を並べ、周囲に周溝を穿ったものとみられる。初期四隅突出型墳丘墓であった可能性も捨てきれない。墳丘周囲の板石直下にしか墓壙を検出できなかったことを考慮すれば、おそらくは上述した波来浜遺跡A調査区4号墓と同様に墳丘後行型の墳丘墓であった可能性があろう。

広島県三次市宗祐池西遺跡1号墓（第6図5） 三次盆地東部、四拾貫小原に近い南畑敷町にある。長辺11m、短辺5.4m、高さ0.5m前後の初期四隅突出型墳丘墓である（尾本原 2000）。第1主体部は3層（灰黒色粘質土）と6層（灰黒色土を含む黄褐色土）を盛った後に掘削された墓壙だが、第3主体部は1層（赤褐色土）の後に盛られた2層（暗黄褐色粘質土）を穿って墓壙が形成されていた。明らかに異なる時期に墓壙が穿れたことがわかる。墳丘構築を継続しつつ埋葬が繰り返されたようであることから、同時進行型の墳丘構築方法を示しているといえる。

以上の類例からみても、江の川流域の弥生時代中期前後にみられる小型墳丘墓には埋葬後に盛り土を施す墳丘後行型と埋葬・封土（盛り土）を繰り返す同時進行型が多くみられることが明らかとなった（今福 2012）。現況の調査例からすれば、小規模な低墳丘墓は墳丘後行型であり、やや墳丘が大きくなると同時進行型に移行していったものとみられる。地域ごとに跛行性があり時期的な細分はできなかったが、弥生時代中期以前には、墳丘後行型および同時進行型の小型墳丘墓は普遍的に存在していた可能性を重視しておきたい。また、弥生時代中期段階の墳丘墓（方形区画墓）の多くは長副比の大きい長方形墳丘をもつものが多いが、この原因としては墓壙数のみではなく、佐田峠3号墓同様、長辺方向に順次埋葬と封土・盛り土を繰り返した同時進行型の墳丘が少なからず存在していたからであると推測できよう⁽⁵⁾。



第7図 墳丘構築方法と葬送儀礼
(弥生時代中期から後期へ)

(2) 葬送の変容

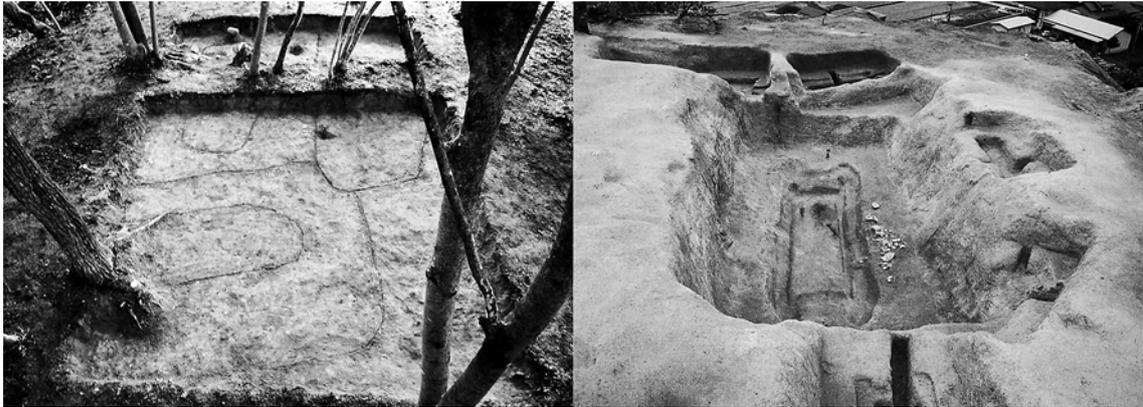
弥生時代中期段階では、波来浜4号墓のような墓壇掘削・埋葬ののちに封土を行う墳丘後行型や高平A号墓から発展、大型化した同時進行型の墳丘墓がみられたことがわかった。佐田谷・佐田峠墳墓群の調査によって、弥生時代後期初頭には同じ墳墓群内においても同時進行型と墳丘先行型が併存しつつも、同時

進行型から墳丘先行型へと変化し始めることが想定できたわけだが(第4・5図)、この墳丘墓の変容を葬送儀礼の時間軸のなかでどのように解釈したらよいのであろうか。筆者はこのような墳丘墓の構築方法の変化を墳丘墓に埋葬される被葬者達の社会的地位の変容とともに、その死に際して葬送儀礼が変化し始めたことによるものと考えている。

一般に人間社会では、生物的死ののちに社会的死を経る。その際、想像的再生を観念するための社会行為として、服喪を中心とした一連の葬儀が長期間にわたって観察される場合が多い(エルツ 1980)。とくに社会的地位の高い人々においては、社会的死に至るまでが時間的に引き延ばされることになる。今回の墳丘構築方法の変化も、当時の地域社会にはなくてはならない重要人物の死によって引き起こされた社会不安を軽減するために、葬送により多くの儀礼的措置を組み込まざるをえなくなった結果と想像することができよう。生物的死と社会的死の隔たりを人為的に再構成し、社会を守護する祖先として観念させるための舞台装置としての墳丘を作りあげて行く集団意識が醸成されていったと想像することもできよう。さらには被葬者の社会的権威の維持や、それによって作り出されたある種の秩序や既存の階層性の社会的再生産を促し、それを機軸とした社会統合を目論むことにもなるはずである(第7図)。

(3) 墳丘墓の発展

佐田谷1号墓における中心埋葬の大型化、墓壇上面での土器供献、標石となる円礫の集積・散布、さらには木棺を覆う木槨構造などは後期後半以降、出雲や吉備、丹後地域において巨大化する弥生墳丘墓の諸要素の遡源とみられている。今回、佐田谷2号墓において、大型中心埋葬の周囲に一部重複して周辺埋葬を圍繞させる墓壇配置(周辺埋葬重複形配置)(野島・野々口 1999、野島 2002)が明らかになった。弥生墳丘墓の発展過程のなかでは、佐田谷墳墓群の先駆的性格がさらに明確になったといえるが、後期前葉の段階において、この墓壇配置を採用した地域はほかに京都府北部の丹後地域しかない(第8図右)。この丹後地域と三次・庄原地域ではともに弥生時代中期から墳丘墓を独自に発展させてきた。丹後地域では弥生時代中期から後期において、方形貼石墓から方形台状墓へとその墓制を刷新していくが、同一墳墓群内においてその変化を見出せるわけではなかった。これまでの調査研究から、丹後地域の墳丘墓は対外的交流によって急激に変容していった様相が認められる(広瀬編 2000)。



第8図 中心墓壙に重複する周辺墓壙（佐田谷2号墓〈左〉と三坂神社3号墓〈右〉）

しかし、佐田谷・佐田峠墳墓群は、方形台状墓と四隅突出型墳丘墓が混在しつつも、漸次的に墳丘墓の変容を示すものであったといえる。この点では弥生時代中期から後期へと弥生墳丘墓の変革を示す遺跡であったということができ、弥生墳丘墓発展の結節点であると評価することができるのである。

4. 今後の展望

今回示した墳丘構築方法の変化については、当該地域および一部山陰地域での現象であり、他地域の状況とは必ずしも一致するわけではない。がしかし、これまで弥生時代の墳丘墓・区画墓の調査研究では、墳丘規模や平面的形態、墓壙配置に関する考察が先行し、埋葬と墳丘の先後関係に注意を払ったものではなかった。発掘調査報告書に関しても、墳丘断面図や盛り土の構築方法、墓壙の掘込方法、標石の出土レベルなど基礎的なデータの一部が示されていない場合も少なくなかったことから、墳丘後行型・同時進行型の墳丘構築方法の具体的な構築技術が明確ではない。墳丘後行型・同時進行型の墳丘構築方法を採用した小型墳丘墓は、墓壙の平面的検出だけでは墳丘先行型と混同されてしまう危険性がある。過去の調査事例の検証も必要となろう。

弥生時代中期後葉に属する三次地域の初期四隅突出型墳丘墓には、山陰地方の土器製作技術の伝統を汲む塩町式土器が供献された。庄原地域の佐田峠・佐田谷墳墓群でも塩町式土器はわずかながらみられたものの、後期初頭にはすぐに吉備南部地域の影響を強く受けた土器が製作され始めた。庄原地域の佐田谷・佐田峠墳墓群は吉備南部地域との交流を深めることによって発展した可能性が高い。三次・庄原地域の墳丘墓が出雲や吉備地域の墳丘墓の発展にどのように関与していったのか、丹後地域など遠隔地との関係も含めて、弥生時代後期の社会動態を見据えた考察をしていかねばならないだろう。

小文は2012（平成24）年10月13日に広島県立歴史民俗資料館で行われた特別企画展開催記念講演会「ここまでわかった中国山地の原始・古代1」において、「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」と題して講演した内容をまとめたものである。講演当初、2012年度末に文章化し

て講演会記録集を作成する予定であったらしいが、諸般の事情で中止となったことから、本誌に掲載した。

なお、小文をなすにあたって、広島大学考古学研究室と庄原市教育委員会、ならびに共同研究担当者、庄原市教育委員会辻村哲農氏から発掘調査情報を提供していただいた。広島県教育委員会 沖憲明氏、(公財) 広島県埋蔵文化財センター 伊藤実氏、および広島県立歴史民俗資料館 葉杖哲也氏には、広島県において調査された弥生時代墳丘墓の発掘調査記録資料の確認と複写の便宜をはかっていただいた。また、ともに佐田峠墳墓群の発掘調査を行ってきた今福拓哉氏や村田晋氏からも多くの教示をいただいた。記して感謝したい。

註

- (1) 佐田谷2・3号墓の発掘調査については、庄原市教育委員会が担当した。なお、現地調査では墓壙掘形の輪郭を平面的に検出するだけに留め、遺構の保全を優先した。
- (2) 2014(平成26)年3～4月、庄原市教育委員会による佐田谷3号墓の発掘調査が行われた。詳細は未公表ながら、出土遺物などにも重要な調査成果がみられる(2014年10月26日、広島大学総合科学部にて行われた広島史学研究会考古学部の研究発表(辻村哲農「庄原市佐田谷墳墓群の調査について」)による)。
- (3) 弥生時代中期の一边数mもない墳墓を「墳丘墓」のカテゴリーに帰属させることには異論もあろうが、今回は埋葬と墳丘(墓壙全体を埋める封土と封土を覆い区画を形成する盛り土)の先後関係に注視して立論していることから、時期に拘泥せず墳丘を持つ墳墓を墳丘墓とした。
- (4) 池淵俊一氏(2007)は波来浜A調査区の墳墓群は全体の被葬者頭位の方向が一致することから、九州北部にみられる列状墓の埋葬原理が踏襲されたものとした。また、方形に区画された埋葬群を分節単位とみなし、田中良之氏(1995)の研究成果を敷衍し、サブクランのまとまりであると想定している。
- (5) 弥生時代後期初頭段階においても庄原市市内町の四隅突出型墳丘墓、田尻山1号墓では同時進行型の墳丘構築の可能性を想定することができる(向田他1978)。田尻山1号墓の発掘調査報告では、田尻山1号墓の墳丘最下層に穿たれた隅丸方形の中心墓壙の上位に、粘土を貼り込んだ木棺痕跡をもつ墓壙がみられるが、これは田尻山16号古墳とみなされている。しかし、またその上位、墳丘頂部平坦面北東にある箱式石棺は弥生時代に属すると考えられているようだが、同時進行型の墳丘構築状況を示すものと想定した方が調査成果を理解しやすい。広島県立歴史民俗資料館において、当時の発掘調査実測図および整理段階の記録と撮影写真確認の結果、同時進行型の墳丘構築状況を示す可能性があるものと判断した。

1970～1980年代前後の発掘調査では、墳丘先行型による墳丘構築と墓壙形成が一般的な弥生墳丘墓であり、当然墳丘頂部から墓壙が掘り込まれたものと理解されていたのであろう。そのため、墳丘頂部平坦面において中心墓壙の輪郭が検出できず、「主体部不明」とされた調査事例も少なくない。とくに弥生時代中期以前の墳丘墓は小規模なものも多く、中心埋葬が薄い盛り土の下層、あるいは地山から掘削されていた可能性を考慮しなければならない。また、丘陵上にある台状墓などでは、墳丘が流出、表土化しており、埋葬と封土・盛り土の先後関係が不明なものも多い。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。
- 石貫弘泰・斉藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群(第1次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、23～38頁。

- 今田昇一・肥後弘幸他 1998 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集、大宮町教育委員会。
- 今福拓哉 2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学考古学研究室紀要』第4号、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、83～100頁。
- エルツ, R. (吉田禎吾・内藤莞爾他訳) 1980 「死の宗教社会学」『右手の優越』垣内出版、30～128頁。
- 尾本原勇人 2000 『宗祐池西遺跡』三次市教育委員会。
- 門脇俊彦 1973 『波来浜遺跡発掘調査報告書』江津市。
- 金井亀喜・向田裕始他 1978 「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県教育委員会。
- 潮見 浩編 1969 『四拾貫小原』四拾貫小原発掘調査団。
- 潮見 浩・川越哲志・河瀬正利 1971 「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集、広島県教育委員会、103～151頁。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会—佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として—」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三 1996 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』柏書房。
- 野島 永 2002 「丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって」『青いガラスの燦き』大阪府立弥生文化博物館図録24、大阪府立弥生文化博物館、88～93頁。
- 野島 永・野々口陽子 1999 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター、19～32頁。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田峠墳墓群(第2次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 野島 永・矢部俊一 2010 「佐田峠墳墓群(第3次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXIV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～39頁。
- 野島 永・脇山佳奈・齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一 2011 「佐田峠墳墓群(第4次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXV、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～38頁。
- 野島 永・辻村哲農・藤井雅大・村田 晋 2013 「佐田谷・佐田峠墳墓群(第6次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXVII、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、27～48頁。
- 野島 永・稲垣寿彦 2014 「佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査をめぐって」『広島県文化財ニュース』広島県文化財協会、4～11頁。
- 広瀬和雄編 2000 『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学、別冊10、雄山閣出版。
- メトカーフ, P.・ハンティントン, R. (池上良正・池上富美子訳) 1991 『死の儀礼』第2版、ケンブリッジ大学出版、未来社。
- 脇山佳奈・今福拓哉・小森由香利・野島 永 2012 「佐田峠墳墓群(第5次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』XXVI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、21～46頁。

和田晴吾 2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）研究成果報告書 課題番号11410108）3～29頁。

挿図出典

第1・2・4～5・7図 筆者作成。

第6図1・2 門脇1973、3 潮見編 1969、4 潮見・川越・河瀬1971、5 尾本原2000各文献（1～4 1/80縮尺、5 1/160縮尺）。

第3図上 野島・石貫・辻村ほか 2009、第3図下 妹尾編 1987 文献。

第8図左 庄原市教育委員会から提供、第8図右 今田・肥後他 1998 文献、巻頭図版1。

Emergence and Development of Burial Mounds in the Yayoi Period, as noted in excavations at the Satadani, Satadao Burial Mound Group, Hiroshima Prefecture

Hisashi NOJIMA

This paper discusses aspects of the emergence and development of Yayoi-period burial mounds, found in the San'in region, western Honshu, and the Chugoku mountain range area.

In 2008, the Archaeology Laboratory of the Hiroshima University Graduate School of Letters began a six-year excavation project at the Satadani-Satadao burial mound group near Shobara City in Hiroshima prefecture. One important result of this research was the discovery of variations in Yayoi burial mound construction techniques. Satadao burial mound No. 3, constructed at the end of the Middle Yayoi period, was built according to a technique, that may be termed “concurrent progressive,” wherein the mound was built by repeated iterations of grave digging, burials, and addition of soil. In contrast, Satadani burial mound No. 1, dating to the beginning of the Late Yayoi period, may be considered to use a style termed here “mound first,” wherein soil was first piled to form a mound, prior to excavation of the grave and burial.

Our research showed that from the San'in region to the Chugoku mountain range, a type of burial, termed here, the “mound last” type, is found, wherein an earth mound was constructed only after digging the grave and completing the burial. The “concurrent progressive” types referred to previously, were common in the Middle Yayoi phase.

The “mound-first” type noted at Satadani burial mound No. 1 appeared in the Late Yayoi period with attributes suggesting that it was the source for the remarkably large burial mounds of the final phase of the Late Yayoi period, such as those in the San'in region, southern Okayama prefecture, and the Tango peninsula. Thus, we identify the Satadani-Satadao burial mound group as an extremely important archaeological site for studying the development, in terms of appearance and increase in size, of the Yayoi-period burial mounds.